



正木小だより

令和6年11月5日

まさき

「読み聞かせ」から「読書」へ 本を好きになる言葉がけ

本校では体験的な学習を進めていると同時に、読書活動も推進しています。秋が深まり、読書をするには絶好の季節になりました。毎朝、朝読書の時間を設定し、静かに10分間、読書に親しむ時間をつくっています。また、読み聞かせボランティアを募集し、保護者の方や地域の方に朝の読書の時間に、読み聞かせを行っています。

こうした中、田口福寿会から、国語辞典、漢字辞典、ことわざ辞典248冊、本校からのリクエスト本661冊、合わせて909冊の本を寄附がありました。図書委員会が早速、貸し出しができるように整理をしたり、おすすめの本を紹介したりしてくれました。おかげさまで、多くの児童が田口文庫の本を借りています。

高山智津子さんの著書「読み聞かせから読書へ 小学生が夢中になる本」の「はじめに」では、次のように書かれています。

本を好きになることばがけはとても大切だと思います。私が本を好きになったのも、母のひとことでした。「本を読む子は、かあちゃんの知らないことをいっぱい知る子になるねえ」このひとことが、今でも思い出だけでうれしいのです。この、母のひとことが私を本好きにさせたといっても過言ではありません。

私も小学生の時に、昆虫や動物の図鑑、推理小説などをたくさん読んだ記憶があります。伝記が好きで、野口英世やキュリー夫人を好んで読みました。今でも、市立図書館で本を借りて本を読んでいます。本を読んでいると、創造力や創造力が身に付き、自分が知らないことを学ぶことができると思っています。過ごしやすい時期だからこそ、読書に親しみ、本から学ぶ子になってほしいと願っています。



田口福寿会の田口会長さんもきっと、同じ願いで本を岐阜県内の学校に寄附しているのではないかと想像しています。感謝の気持ちを込めて。本校の児童が、田口文庫の本をきっかけに読書に夢中になることを願っています。

校長 花村伸二